

得て見せければ、漸く城を渡して流浪せり。于時十八歳なり。後柴田勝家の謀にて利家卿に奉仕す。元龜元年越前金崎の城實に、苦戦して首級を獲たり。其の秋攝州天滿に於て、利家卿殿し給ふ時、村井又兵衛長頼と共に力戦して傷を被りけり。自餘毎戰從軍して頗る武功を顯せり。天正十一年四月利家卿金澤入城、同年五月永福をして能登末森城を守らしめらる。然るに翌十二年九月越中の領主佐々成政、大軍を率ゐて末森城を取巻き、急攻する事一晝夜、城將に陥らんとす。永福及び長男榮明死力を盡して防戦し、室家加藤氏も長刀を持ち、侍女を率ゐて城中を巡り、城兵を勵ます。永福急を金澤に告ぐ。利家、利長兩卿取敢ず後援なし給ひしに、永福城門を開きて突いて出で、敵兵を挟み討ちにす。佐々の兵大に敗北し、越中へ引取りける。利家卿其の特功を賞して、感狀を賜はり、且利家卿其の日着し給ふ所の甲冑・太刀・腰差等に馬幟を添へて賜りたり。同十五年四月筑紫陣に利長卿に從軍して、豊前磯石の城實に先鋒し、城中に入り疵を蒙る。同十八年關東北條征伐の時、松枝・八王寺の城實に先登して鎗を合はせ、亦疵を被る。

文祿四年三月叙爵し、伊豫守を拜任す。家祿追々加恩ありて、一萬千九百五十石を賜はり、慶長元年致仕し、家祿を長男榮明に譲り、剃髮して快心と稱し、慶長十九年大坂城實の時金澤の城代を勤め、寛永元年六月十二日卒す。享年八十四歳。石川郡野田山に葬る。寛文十三年木下貞幹をして碑文を撰ばしめ、一世の勳功を記載して墓前に建てたり。長男榮明も末森以來の武功あるを以て、屢家祿を増加せられ、慶長元年叙爵して河内守を拜任し、且弓術に長じけるに依つて、射士四十騎を預けられ、元和元年十一月利常卿の世子光高君誕生の時、命に依つて墓目の弓術を勤む。夫れより家格と成り、世々小君懷妊の都度墓目の規式を命ぜられたり。又世子誕生初めて産神社參の時、必ず第宅へ腰をかけ給ふを家例となしたりけり。

○奥村氏内室加藤氏傳話  
家譜に、永福娶尾州人加藤氏女。生四男一女。とありて、此の内室は、尾州官の住人加藤與三郎の娘なりとぞ。野田山碑文に云ふ。天正十二年九月、成政率率大兵襲末森城。急攻一日一夜、城將陷者數矣云々。内子加藤氏持長刀。率

侍女巡城拊循、皆感激勇氣百倍云々と。家譜に云ふ。永福室加藤孺人。使婢僕煮粥以扶士卒之飢。或自犒之云々。とも見ゆ、また異本末森記に、末森の城中に會て吞水なかりしかば、奥村氏の内室種々才覺せられて、とすいの下を掘らせけるに、水多く出でたり。其の水を以て食物を調へけるに、其の水ごみくさくて食物等調へ難く叶はざるに、内室の工夫にてこしきを立て蒸しけるに、くさみ去りて清水と成りたり。此の外種々工夫致され、諸人勇みけりとぞ。按ずるに、前田創業記に、利家卿召歩卒曰、聞末森水手既敗。願城兵水乏及渴乎、汝等汲廣岡名水入、窺來。可飲城兵乎。揚鞭、と見たるなどにて、末森城の水手を敵にきられ、困難せしこと知られけり。此の外にも内室の働き尙多かりしといひ傳へたり。

○鑄屋小路

龜尾記に云ふ。鑄屋小路といふは、石引町より後石引町へ出づる小路にて、奥村下邸の北方なり。一説に、鑄屋小路は竹澤邸の前通りをいふともいへりと。平次按ずるに、右の一説は非なり。元祿六年の士帳に、石引町後鑄屋小路と

見ゆ、今も石引町の裏、元奥村下邸の小路を呼べり。

○鑄屋宇右衛門傳話

國事昌披問答に云ふ。奥村丹後守下屋敷邊を鑄屋小路といふは、昔鑄屋宇右衛門とて鑄鍛冶の名人居たり。其の子權兵衛と云へるも上手にて、二代とも名高く、通り町より小路へかけ大きな家作にて、裕福に有之處、次第に零落なしたりけん。權兵衛の死後、その塔三郎右衛門といへる者家を繼ぐといへども、遂に右の家屋を賣拂ひ他所へ退去しける。然れども名高き鑄屋なりしゆゑに其の名残りて、今に至りつばやせうじといへば、人此所へ來るなりとぞ。或人曰く、當地金澤府下に刀劍の鍛冶は、兼若・勝國・兼卷・清光或は家次・家忠などを初めとして、夥多の鍛冶共多く、其の弟子家の鍛冶も數名ありといへども、其の鍛へたるものは刀・腰物の類或は鎗・長刀・矢根・小刀の類のみにて、いまだ兼若・勝國などの打ちたる鑄を見たる事なし。鑄も刀劍と同じく、其の鍛冶を吟味するは勿論なり。いにしへより評戦の時、鑄を切り割られ、夫れが爲め疵を蒙り、或は戦死せし人なきにあらず。故に國初の頃は、刀劍と共に鑄